

# 地域みんなで 子供たちの未来を考える ワークショップのすすめ

— 地域とともにある学校づくりに向けて —

文部科学省委託事業

「学校の総合マネジメント力の強化に関する調査研究」



制作●株式会社ノースプロダクション

〒089-5601 北海道十勝郡浦幌町字宝町 53-26

TEL : 015-576-4678

FAX : 015-576-3772

E-mail : edn@north-production.co.jp

協力●みらいず works

# 学校×地域の 協働の気運を高めるために



## 協働に必要なことは、「熟議」と「マネジメント」

「協働」はとても大切な概念です。そして学校と地域が協働していくことは大事なことです。しかし協働は、第三者からの要請で築いていくものではありません。必要性の中から自ずと育まれていくものだと考えられます。異なる立場にあるものどうしが、互いの立場や特性を分かり合い、その上で学び合い、力を出し合い、そして互いが変わっていく姿を見ることが自らも変わろうとする、そんな姿が協働の原点ではないでしょうか。学校と地域の協働を考えた場合、地域と学校に関わる多様な立場の人たちが参加し、「関わって良かった！」と実感できる結果につながるような熟議のテーブルを作ることが大切です。本パンフレットでは、全国各地で先進的に進んでいる協働事例とそこに携わる方たちからの知見をもとに開発された「熟議を基盤に学校と地域が協働していく気運を高

めるワークショッププログラム」を紹介しております。そして本ワークショップは、明確な到達目標を設定した研修のような性質のものではなく、プログラムの実施を通して、あくまでも結果として自然発生的に協働への気運が高まることを目指し作成しました。またプログラムを全国各地でも使えることを想定し、運営にあたってのポイントを紹介しております。そして最後に実際にこのワークショッププログラムを活用した地域の事例を紹介しております。本質的な協働体制を構築するには、「熟議」だけではなく、熟議から育まれる新たな関係性を軸に実際に行動にうつしていく等といった、より良いカタチに発展させる「マネジメント力」が必要です。そこへのヒントをぜひ、実践事例より掴んで頂けたら幸いです。次頁から具体的に紹介していきます。

## 学校×地域の協働が求められる背景

子供たちの「生きる力」は、多様な人々と関わり、様々な経験を重ねて行く中で育まれるものです。学校だけで育まれるものではありません。子供たちは地域社会とのつながりの中で、絆を育み、豊かさ・たくましさを身につけていきます。つまり、子供たちの確かな育ちを保障するには、信頼できる大人との多くの関わりが不可欠だと言えるでしょう。子供たちが豊かで健やかな成長を遂げるために、また現在の学校や子供たちが抱える課題や家庭・地域社会が抱える課題等を解決してい

くためにも、学校・家庭・地域がそれぞれの役割を果たしつつ、社会総掛かりでの教育の実現がいまこそ必要です。そしてそのことが「地域とともにある学校づくり」にもつながっていきます。そのためには、まずは、学校と地域それぞれが互いを理解し合うことが大切です。そして「学校」と「地域」が協働体制を確立していくことが求められてきます。本パンフレットは、平成26年度文部科学省委託事業「学校と地域の協働体制を確立するためのプログラム開発～学校の総合マネジメ

ント力強化に関する調査研究」で作成されたものです。学校×地域の協働への気運を高めることを目指して作られております。本パンフレットの活用から、「学校×地域の協働」のきっかけが作られればと願うとともに、全国各地で子供たちのために日々奮闘されている学校長はじめ教職員の皆さんそして教育委員会職員など教育関係者の皆さんが「学校×地域の協働」を進めるヒントを感じて頂けたらと期待しております。

## 学校協働のメリットとは？

### 子供・保護者 にとって

- ◎地域のいろいろな人が学校に関わるため、学びに多様性が生まれます。
- ◎地域の大人に見守られることで、子供が地域とのつながりを実感し、安心感が生まれます。

### 学校の教員 にとって

- ◎地域との信頼関係が深まり、教育に参加してもらうことで、教育活動に厚みを生み出せます。
- ◎地域に目を向けて、多様な人々と関わる経験は、教員の知見を広げることにもなり、指導力の向上が期待できます。

### 地域の人々 にとって

- ◎子供たちが地域の一員という意識を深め、ふるさとへの愛情が深まります。
- ◎地域の人々がつながる場として学校が機能することで、地域のネットワークが形成されます。

# 地域みんなで子供の未来を考えるワークショップに取り組む

本ワークショップでは、学校と地域の関係者がコミュニケーションを深めながら、取り組まれることによって、結果として「協働」への気運につながることを目指して組み立てられています。またワークショップの実施主体は学校×地域の協働への気運を高めることを期待する学校や教育委員会を想定しております。このページでは「協働の気運を高めるために」作られたワークショップの「概要」「特徴」「ポイント」について説明します。



## ワークショップの概要

ワークショップのテーマは、「地域みんなで子供の未来を考える」です。子供たちは未来の宝です。学校及び地域の様々な立場の方たちが一緒になって子供の未来を考えることはとても大切なことであると同時に、学校と地域が同じテーブルで熟議するには最適なテーマと言えます。「導入ワーク」で話しやすい環境をつくり、「子供の未来をめぐるビジョンの共有」「ビジョン共有に向けたアイデア出し」がワークショップの中核となります。

そしてワークショップをただ実施するのではなく、「学校×地域の協働」につなげていくためには、「地域とともにある学校づくり」の推進を目指しこのワークショップを企画した主催者代表、例えば「学校」であれば学校長が、「教育委員会」であれば教育長が、ワークショッ

プの発表を聞き、「主催者挨拶」として感想をスピーチすることが大切です。子供の未来を考え学校×地域の協働作業で生み出されたアイデアは素晴らしいものばかりです。もしそれらを讃え認めるようなコメントを主催者が話されたのならば、それを聞いた参加者のやりがいにつながり、「参加してよかった!」「自分たちのアイデアが活かされた!」という成功体験から、参加者が「地域とともにある学校づくり」に関わることを前提とした協働意識の向上に大きく寄与していくはずで。また「地域とともにある学校づくり」を推進していく主催者代表の「本気」と「覚悟」をこのスピーチで示せることができれば、学校と地域の協働体制の確立に大きな一歩を踏み出すことになるでしょう。

## ワークショップの特徴

ワークショップの基本は、人の発言や考えを否定しないことです。しかしながら異なる立場の方たちが集まった場では、時として場の空気が悪くなるような発言が飛び出し、協働とはほど遠い関係性を築いてしまうこともあり得る話です。そんな中、本ワークショップでは、テーマを「地域みんなで子供の未来を考える」としました。地域総掛かりで子供たちの未来を考えることはとても大切なことです。もう一方でこのテーマ設定は、異なる立場の方が集まって熟議しても、自分勝手な発言につながる可能性が低いと考えられます。なぜなら、我々大人たちにとって、子供たちの未来は、何よりも最優先で考えるべき普遍的な価値があるものだからです。「未来の子

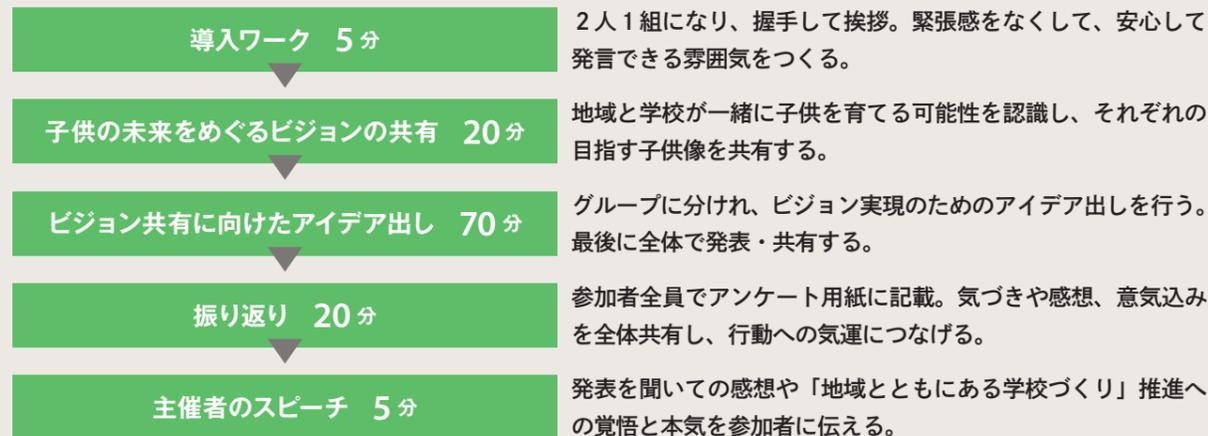
供たちがどんな風に育ってほしいのか」その願いは人それぞれですが、そのテーマは常に、未来思考であり、前向きな発言につながります。そしてそれぞれの考えを共有することは、集まった方たちの一体感へとつながっていきます。さらに本ワークショップでは、参加者で共有した「子供像（ビジョン）」に近づくために、学校が困っていることを軸に教職員から出された課題を解決していくために、学校と地域が協働し、何ができるのか？アイデア出しを行うことになっています。この流れは、これからの学校と地域が協働して行うべき行動（アクションプラン）への大きなヒントにもつながるはずで。

## ワークショップのポイント

- 1 参加者が緊張することなく、またフラットな関係性の中で自由に発言できる場を作ります。
- 2 異なる立場の関係者が子供たちを核としたビジョン（未来の子供像）について語り合います。
- 3 参加者が自由に語り合い、思いや願いを共有する中で、目指す方向性を共有します。
- 4 参加者は一部の組織や役職者などに偏らず、様々な年齢や肩書き、立場で構成します。
- 5 学校の困りごとに着目し、「一緒に解決しよう」という意識を高め、一体感やワクワク感、当事者意識を生み出します。
- 6 参加者全員で気づきや意気込みを共有し、ワークショップの集いが継続していくように気運を高めます。
- 7 主催者は、参加者からビジョン共有のために出されたアイデア・感想を真摯に受け止めます。
- 8 主催者は、「地域とともにある学校づくり」の推進に対する覚悟と本気を参加者に示します。

### ワークショップ概要図

- ◎想定される出席者：小中学校教職員・保護者・PTA関係者・教育委員会職員など
- ◎実施に係る所要時間：120分



# 子供の未来をめぐるビジョンの共有

保護者 (PTA 関係者) や地域住民そして教職員で「子供たちがどう育ってほしいか」ビジョン共有を図ります。それぞれの異なる立場から子供の将来についてどのようなビジョンを描いているのか。

参加者全員それぞれで考え、それを共有していきます。

同じ方向を向いて子供の未来を語ることがワークショップ前半のテーマです。

## プログラムの流れ

### 導入ワーク

5分

ねらい

緊張感をなくして、安心して発言できる雰囲気をつくる。

流れ

- 1 2人1組になり、握手と簡単な自己紹介をした後、子供や地域の自慢をし合う。
- 2 自由に歩き回り、3分以内にできるだけ多くの人とコミュニケーションを取る。

### 手法1 アイスブレイク

本題のテーマについて話し合う前のウォーミングアップです。初対面の参加者同士が、握手して自己紹介をすることで、距離感がグッと近づきます。子供や地域に関する「自慢」というお題は、子供の育ちというワークショップのテーマにも関連しています。

### ビジョンの共有

20分

ねらい

地域と学校と一緒に子供を育てる可能性を認識し、それぞれのめざす子供像を共有する。

流れ

- 1 進め方を説明する。
- 2 テーマを発表する。
- 3 一人ひとりがテーマに対する思いを一つ、用紙に記入して回収する。
- 4 無作為に抽出し、読み上げられた人は、自己紹介をしてから内容について補足説明をする。
- 5 進行役が模造紙に整理し、全体の意見として共有する。

### 手法2 テーマ設定

参加者全員がビジョンの共有するために、「子供たちがどう育ってほしいか」というテーマを設定しました。意見が多過ぎると共有しづらくなるため、選りすぐりの一つを記入してもらいます。

### 手法3 アンケートゲーム

順番に発表するのではなく、くじ引きのように袋の中から取り出して読み上げ、それを記入した人が説明をするという方法にしています。

### 手法4 進行役による整理

参加者の意見は、似たものはグループ分けし、それぞれのグループに分かりやすい名称を付けるなど、ホワイトボードに整理して「可視化」します。

## 進行のポイント

立場の異なる参加者の思いを一つにまとめ、その後のアイデア出しをスムーズに進めるためには、どのような点に心がけてビジョンを共有すれば良いのでしょうか。運営上のポイントを解説します。

### ポイント1 自由に発言できる雰囲気をつくる

ワークショップを活性化させるためには、自分の考えを伝えたいという雰囲気をつくるのが先決です。最初は誰でも、多かれ少なかれ緊張していますから、例えば、握手と挨拶に続いて「自慢」という形で自分の考えを自由に伝える時間を設け、「何を話してもいい」という安心感を抱いてもらえるようにします。自慢の内容を「子供」と「地域」の2つにしているのは、教員や保護者は子供、地域住民は地域に関わることが話しやすいからです。



### ポイント2 発表方法にゲーム性を持たせる

ワークショップのベースとなるビジョンは全員で共有することが重要ですから、グループワークではなく、全体で行います。その分、一人ひとりの発表時間があまり取れませんが、用紙に記入する過程で自分の考えを整理しているため、発表者は手短かにポイントを説明することができます。

また、多くの参加者が順番に発表する方法は、単調になりがちで、聞き手の集中力が途切れやすくなります。そこで、くじ引きのような形で発表者を決める手法で、ちょっとした「ドキドキ感」を味わってもらいます。

### ポイント3 発想力を喚起するテーマを設定

テーマ設定は、あらゆる立場の参加者の発想力を喚起するものにすることが大切です。もし、「どのような子供を育てるべきか」といった「べき論」を語るとしたら、決まった正解があるような気持ちになり、自由な発想が促されにくくなります。

また、「どのような力を育てたいか」とした場合は、「○○力」といった型に縛られて、思考が制限されやすくなるかもしれません。

### ポイント4 進行役が整理し、全体で共有

進行役が皆の意見をまとめる際には、主観をできるだけ排除するように努めます。一方で、参加者の強い思いが感じられた意見は強調して書くなど、その場の雰囲気を感じ

取って話し合いを方向付けるような役割も、時には必要になります。